



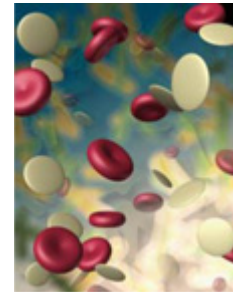
■ ～ヘモグロビンA1cについて～

ヘモグロビンA1cについて

昨年より、糖尿病や妊娠中の血糖(ブドウ糖)値について、より厳しく判断される事になりましたが、血糖と共に測定され、慢性の高血糖の状態を反映する検査にHbA1c(ヘモグロビン・エー・ワン・シーと読みます)があります。

今回はそのHbA1cを取り上げます。

ヘモグロビン(Hb)は血液の中の赤血球に含まれ、肺で酸素を取り込み、酸素を体の中に運ぶ働きをします。HbA1cは、そのヘモグロビンに血糖が付いたものです。血液中の糖が増えてくると血糖値が高くなりますが、ヘモグロビンに糖がついたHbA1cも高くなっていきます。血糖値は血液を採ったその時点の血液中の糖の値ですが、HbA1cは採血した時点の1～2ヶ月前からの血糖値の平均的な状態を表しています。



赤血球は体の中でドンドン作られています。働きを失った先から壊されていきます。HbA1cはヘモグロビンに付いている為、赤血球の壊れる寿命まで蓄積されていきます。赤血球の寿命は普通120日と言われ、約4ヶ月です。HbA1c値の半分は過去1ヶ月の間に作られ、1/4は2ヶ月前、残りは3～4ヶ月前で作られた値とされています。HbA1cは一般的に1、2ヶ月前の血液中の糖の経過コントロールを見るために検査されます。

HbA1cはヘモグロビンに対する割合(%)で表され通常、4.3～5.5%(JDS値)がいわゆる、正常値です。診察日、健診日となると食事制限をしたり、診察当日は食事を取ってはいけないと考え、来院される場合もあるかと思われます。血糖値が極端に低かったり、高かったり、前回値と異なったりした時など、HbA1cでは平均的な血糖値がコントロールされていたかの目安になります。

また、HbA1cをどこの病院で検査しても同じデータが出せるようにしようといった国内の動きがありますが、国際的にも同じ数値で表そうという動きがあり、測定値を二通りで表現されることがあります。測定されたデータに(JDS値)とか(国際標準値)と記入されている場合は(JDS値)+0.4=(国際基準値)と考え、JDSで5.6%未満(一般的に何も書かれていないときはJDSです)、国際標準値で6.0%未満は問題ないと考えますが、貧血があったりするとHbA1cデータに影響することもあり、血糖値と比較すると異なったデータになることがあります。1つの数値だけでなく血糖値と合わせたデータにより判断されることが必要になります。



担当:臨床検査係長 笠原 せい子